日梓市教育委員会所属

荘田平五郎没後100年プロジェクト

平五郎紀行―その2

## 臼杵-研鑽の風景

幕末に生まれ、青春期を明治の創生期とともに歩んだ荘田平五郎。 彼がその生涯をかけて近代的な企業、そして産業を育んだ根源はどこ にあったのでしょうか?その原点は国内のいくつかの場所にあります。 3回のシリーズで彼の足跡を追ってみましょう。

江戸一この時代に向学心を持った若者なら、あこがれてやまない町でした。そこに住む人々は約百万人、世界一の大都市であり、日本中の情報が集まる場所でした。

慶応4年(1868)4月、臼杵から約一月の旅を経て、平五郎は江戸の臼杵藩下屋敷に到着します。それからすぐに英学を学ぶ 先を探しますが、このとき候補にあがった一つが、福沢諭吉が主宰する「慶應義塾」でした。しかし塾生たちの素行がよくないと 言われていたこともあり、平五郎は下谷金杉町(現:東京都台東区下谷3丁目)にあった青地信敬の塾を選びました。

しかし半年もたたないうちに青地塾は閉鎖され、途方に暮れた平五郎は一旦臼杵に帰ります。英学の面白さに目覚めていた平五郎は、帰郷しても英学を継続することを強く望みます。その時に藩の役人が紹介したのが、薩摩(鹿児島県)に開設された「開成所」(現:鹿児島市小川町)でした。平五郎はこのことを知り、藩の紹介状を持って、後輩の宮川玄水(のちの海軍軍医中将 河村豊州)と早速旅立ちます。薩英戦争後にイギリスと交流を行い、さまざまな最新技術を導入した薩摩での平五郎の学業は著しく進歩し、翌年の明治2年には「洋学局」と名を変えた開成所の教員になりました。

このころ、明治という時代はまるで轟音を上げるかのようにすさまじい勢いで近代化に突き進みます。その中心となったのは、江戸から名前を変えた「東京」でした。平五郎のまなざしは最先端の学問のできる東京に再び向けられます。この年、平五郎は洋学局の教員を辞め、臼杵に帰って上京する準備を始めます。東京のどこでどう学ぶかも定めないままの準備でした。



▲「青地塾」のあった台東区下谷金杉三丁目の現在



▲「開成所」のあった鹿児島市小川町の現在

## 荘田平五郎没後 100 周年記念献花式を行いました

荘田平五郎氏の100年目の命日にあたる4月30日、記念の献花式典が臼杵商工会議所の主催により開催されました。 出席された荘田さんのご子孫の方は、当日臼杵市歴史資料館の企画展示をご覧になり、「臼杵の人達の荘田平五郎に対 する愛情を感じ感激しました。」と述べられていました。

